



鹿沼の自然・栃木の旅

月報第46号

(2016年9月)



田部重治著『日本アルプスと秩父巡礼』と

『日本アルプスと秩父巡礼』回顧」所収の「本の手帖」（詳細は4頁から）

私たちが山に登るのは、つまり山が好きだから登るのである、登らないでは居られないから登るのである、一般登山者の多数は恐らく亦そうであろうと思う。勿論登山に伴う困難や稀に危険は、時として甚だ大なる者があるに相違ないが、山に登らないでいる苦痛に比較すれば、遙に小さいと称して憚らない。なぜ山に登るか、好きだから登る。答は簡単である、しかし夫で充分ではあるまいか。

登山は志を大にするという、そうであろう。登山は剛健の気象を養うという、そうであろう。他の日く何、日く何、皆そうであろう。唯私などは好きだから山に登るというだけで満足する者である。

(田部重治著『日本アルプスと秩父巡礼』巻頭、木暮理太郎による「序」より)

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



奥白根山ハイキング

おもな火口を数えただけでも五指にあまった。この山がいかに激しい噴火を繰返したかを、それは物語っている。記録に残るところでは、最初の噴火は寛永2年（1625年）で、その後しばしば爆発があり、明治になってからも6回数えられる。その最後は明治22（1889）年であって、12月4日突然遠雷のような鳴動が始まったので、山麓の人々は磐梯山の二の舞ではないかと怖れて避難したが、大した被害はなかった。

深田久弥著『日本百名山』（昭和39年7月20日、新潮社発行）

「奥白根山」より

奥白根山（標高2578m）は浅間山より高く、関東、東北、北海道の中では最も高い山です。しかし、あれが奥白根山、と指さすことのできる人が少ないのは、周囲にいくつかの山を従えていて、山の形の特徴を言い表わすことが難しいからでしょう。

丸沼からゴンドラに乗って標高2000mまで稼ぐこともできますが、本峰直下までのだらだらした登りはたまらない。今回は菅沼からのコースをとりましょう。登行標高差は840m。全体的に急登で距離が短くてすみます。弥陀ガ池や五色沼をめぐるコースは変化が多く観察すべき自然の豊かなコースです。山頂周辺ではトウヤクリンドウ、避難小屋から西方の窪地（五色沼から西に延びる窪地は噴火口ではないという）を探索すれば、コマクサの花も見られるかもしれません。

日 時：10月2日（日）AM4:00 北小西門集合

行 程：鹿沼（北小）4:10——土沢IC——清滝IC（日光ニFM）——中宮祠
 ——金精峠——菅沼⑩…（140分）…弥陀ガ池…（70分）…
 奥白根山…（45分）…五色沼避難小屋…（20分）…五色沼…
 （30分）…弥陀ガ池…（90分）…菅沼茶屋——金精峠——中宮祠
 ——清滝——神橋——日光IC——土沢IC——鹿沼（北小）

服装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

1/25,000 地形図は「男体山」

熊対策：熊鈴、ラジオ（休憩中にも有効）、ピッケル、熊撃退スプレーなど

参加費：おとな 800 円、子ども 400 円

今年度保険料（4～3 月、1 年間有効）として

子ども 800 円、おとな 1,850 円（65 歳以上 1,200 円）

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



📅 次回予告等 📅

自然・歴史関係の催物案内

10月10日（祝） 男体山

AM5:00 北小西門集合——日光二荒山神社中宮祠——男体山山頂（往復）

10月16日（日） 鹿沼学舎主催

花木センター見学と茂呂山自然観察会

AM8:30 北小西門、または AM9:00 花木センター集合

AM12:00 終了予定

10月23日（日） 鹿沼史談会主催

菊沢地区西部（下遠部）のさとめぐり

AM9:00 下遠部農村公園内駐車場集合

詳細は追ってお知らせします。お楽しみに。

田部重治著『日本アルプスと秩父巡禮』

(大正6年6月8日・北星堂発行)

薬師岳と有峯

神通川の上流——跡津川——大田和峠——有峯——太郎兵衛平——
薬師岳——水須——クマゴ——東笠ヶ岳——有峯——真川——立山温泉

小児の時分から私等は、有峯アリミネのことに就て色々の面白い伝説を聞かされている。私の郷里と同じ郡でありながら有峯と云えば、全く絶海の孤島にある未開の異人種の住んでいるところと云う風な感じは、何となく抱かせられた。たまに有峯へ行った人があると、皆でよってたかって有峯の珍しい話をきくことが楽しみとなって居た。人家のないところを、8里も行かなければならないとか、郵便脚夫が1週間に1度鉄砲を担いながらそこへ行くとか、平家の遺族がそこにいるとか云う話は、私等をしていつかそこを訪ずれて見なければならぬと云う心持を漸次高めさせて居たのである。

丁度明治42年の7月、私は弟や甥と共に、早月谷ハヤツキダニから立山へ登ったことがある。私はそれまでは未だ壮大な山容や、雲溪と云うものの偉麗を見たことはなかったが、早月川の雪渓を登りつつ大日岳ケカツや毛勝山の雄大な姿に驚き、立山に登って、立山や劔岳ツルギダケの外にはあまり山が無いと思って居た私は、斯くまでも残雪うるわしい山の多くに取巻かれているのに驚異の眼を見張った。

其時に私は、特に、薬師岳の姿によって捉えられたのである。私はそれまでは薬師岳を富山の平原から度々見て居たのであるが、誰も、それを薬師岳だとは教えて呉れなかったのである。

私は残雪多い其山姿にみとれながら、小児の時分から耳にしていた其麓の有峯のことを思い出し、其深林、其溪谷のことを想像した。そして私はどうあっても、遅くも、来年には薬師岳に登らなければならないと思った。其翌日立山から立山温泉に降ろうとして松尾坂にかかった時、私は再び薬師岳が残雪を真白に頂いて正面



に屹立っているのを見て、愈々そこへ登らなければならないと思った。

家に帰ってから、私は薬師岳や有峯のことを考えた。約10日ばかり経って、立山へ登った疲れが直った時、私の薬師へ登ろうと云う考が俄かに盛んになって、来年度を待っている考のはかなさを笑った。そして直ぐに決行しようと欲して、私の弟や甥を誘い出した。

私等同勢6人は、朝の4時頃出発した。私等は飛騨から迂回して、約17里を、其日の内に行く予定を立てたのである。私等は家を出て、富山の一角を通り、富山の平野を4里あるいて、笹津から神通川に沿うて進んだ。暑い中を、特に蒸し暑い飛騨街道を、各自に米や味噌を携えながら砂けぶり立てて行くことの辛さは、私等をして、予定よりもずっと行程をにぶからしめた。越中と飛騨との国境を通過し、茂住の鉾山を過ぎて土と云うところへついたのは、2時頃であった。そこは有峯から5里と云って居るところである。ここから道は、高原川の支流跡津川について登るのである。美しい流は藍のように色深く、盛んに筏を流しているのを下に見て行く。2里先の^{オオダワ}大田和と云うところへ行くと、大分日が遅いような気色になって来た。是から先は3里の無人境を行かねばならないのであるが、初めての道に加えて、時刻が遅い、若しや迷いでもすると大変だと云うので、案内者を1人傭おうと云うことに一致して、探して見たが、誰も応ずるものはない。困っていると丁度道のほとりに草を刈って居た14、5の少年が、以前に一度有峯に行ったことがあるから案内しようとして申し出した。あまり若いので案ぜられたが、外に人がないので、行って貰うことにして、先へ立てて出立した。

村から先は、道はすっかり深林の間を絶えず通過する。日暮頃大田和峠にかかると、夕立がやって来て、あそこの峯この峯の密林を、大粒の雨が斜めに霧を吹きかけて居るのが、何とも云えぬ程美しく見える。道は深林又深林の中を進んで、溪流の音が絶えず其間に響いている。之が馬が通る道なので、あまり悪くはないが、夕暮なので林と云い、溪流の音と云い、何から何までが威嚇的に見える。

其の内にはすっかり日は暮れて仕舞った。提灯を手頼りに進んで、時々螢の飛び出すのを見ると、もう村へ到着したのかと思う。案内者の考もうろ覚えなので、色々の質問に対して、可愛相に、絶えずまごついている。斯うして行く内に、大分林がなくなり、前方が開けて、草地があらわれて来る。それを分けて行くと、突然前の方に

(次ページへ続く)

火が見えて、今度はまごうことなき灯火で、話し声が洩れ聞える。急いで行って、私等の有峯に音ずれた事情を話して、泊めて呉れるように頼むと、主人は喜んで内へ入れて呉れる。丁度それが9時頃であったと思う。



主人は河口と云う嘗て日露戦争に工兵として旅順で戦ったことのある男であった。私等は大きな炉辺に集まって、焚火にぬくまりながら、御飯を焚いて貰って、やっと晚餐にありついた。私等は有峯に米が無いと云うことを聞いて居たので、わざわざ背負って来たのであるが、聞いて見ると、ここでは無論できないが、買込んでもっているとのことであった。私等は明日薬師岳へ登ろうと云う考のあることを話して、主人に案内を頼んだが、それも快諾を得た。いろりの話は尽きないが、あすは早く出掛けなければならないので、飯を喰って間もなく炉辺に寝ころんだ。

次ぐ日、私等は3時過ぎに起きて、出掛けたのは5時前であった。有峯の溪は細長く縄のようにくねって、一方は亀谷川の西谷が流れ、他方を東谷が流れて、やがて村で合流している。私等は西谷から東谷の方へ進んで、村を離れてから山に取りついて次第に登り行く。登り行くにつれて、樹木は大きくなり、段々林が深くなって行く。斯うして2里余りも登って真川に沿う嶺にたどりつくと、前面には薬師岳と上ノ岳の豪壮な山容は、残雪美わしく天涯を限っているのを仰ぐことが出来る。これから道は下向きとなって、しばらく^{マカフ}真川の谷に降る。降り切ると^{カワシ}側師の小舎があって、曲物等をこしらえて居る。小屋はこの材料がなくなると、他へ移転するのであると云う。真川はここで2つに分岐し、右の方は良材を以て名ある寺地山から、左の方は、上ノ岳から出るものである。私等はここで暫らく休んでから真川を渡って、向うへ登りはじめた。

ここから約1里の道は、壮んな林相を呈せる深林のなかを分けて行く。やがて林つきで、前方に茫々たる高原が次第にあらわれて、雄大なる気分が段々あたりを支配して来ると、左の空に大日岳の雄姿が、屹立しているのが眼にはいる。道は次第に登って、左斜めに薬師岳の麓に近づくように進んで行く。登りつめると、黒^{クロ}岳^{ダケ}、^{ワシ}鷲^ハ羽^ツヶ^ハ岳、^{ヤリ}槍^ツヶ^ハ岳等が、残雲斑々として荘厳な姿を以て天涯に聳立しているのが前面に見えて、見るからに神々しい気分が襲われ、黒部川を距てて向うには、雄

(次ページへ続く)

大なる奥ノ平の高原が開呈されて、雄渾の趣致を漲ぎらせて居る。私は之等を見て初めて、多年心の内に描いて居た深い深い奥山と云うものに辿りついたような気がした。原の一角に立ってあたりを見廻すと、標高7500尺の此の高原は、ただ美しい残雪と草とによって蔽われ、所々に偃松があるのみで、颯爽として気宇雄大に、丁度私等の通る時には、其の一方の空高く一羽の鷺が舞っている。ここを太郎兵衛平と称する所以は、長門の太郎兵衛なる者、ここで金を掘ったからだと言われている。道は原から少し降り気味に薬師岳の麓に達する。そこに私等は暫らく休んで、持物をのこらず置いて、空身になって出掛けた。

丁度登り口に沢があって、それについて登ると、和らい草^{グロベ}地に出て、そこから上の密林を避けて右に黒部川の溪谷の方へ迂回して行くように道はついている。幾度か斜面を登ってやがて道は嶺の上に立て、それをどこまでも行くと頂上に達する。そこには薬師を祀れる間口8尺、奥行3尺の堂が立って居る。丁度頂上に達すると共に、立山、劔岳方面は雲に蔽われて仕舞ったが、赤牛、黒岳、鷺羽、野口五郎、槍ヶ岳、黒部五郎方面はじりじり動く雲の間から神秘的の姿をあらわしている。私はじっと見入った。そして立山に登った時よりも遥かに深刻に自然の偉大と云う感に打たれた。私は案内者から、槍ヶ岳は以前は富士山よりも高かったのが、其穂先が折れて低くなったのだと云う面白い説明をもきき、有峯所有の山ではこの黒部の溪谷の向うの水晶山(黒岳)の方がここよりも、もっと高くして水晶が沢山あること、及びそこへ行くことの一通りでない困難なことを聞かせられた。これらを聞いて私の想像は、黒部川の溪谷及び槍ヶ岳及び信州方面へ飛んだ。此の秀麗な山々、此の神秘的な溪谷は、私の想像していたものよりも遥かに優れているものであった。そして之を知らずに居た私の何と貧弱なものであつたらう。

之を知った私の何と今は富めるものであろう。私はすっかり亢奮して仕舞った。

私等は之等の山々がすっかり雲に蔽わるるまで見て居た。そしてすっかり山が雲に蔽わるるに至って降り

はじめた。私等は駆けるように降りて太郎兵衛平に帰って、昼飯をたべた。そして此美しい高原に再会をちかかって、真川に降り、そこでしばらく休んで、夕暮、有峯へ帰った。



(次ページへ続く)

私等は其夜炉辺で夕飯を喰いながら、色々の面白い話をきいた。丁度其夜は主人の弟が、山仕事から帰って来て、一昨日山中の密林中で熊にあって、絶体絶命になって、仕方なく死人をよそおつてのがれた話や、熊に関する色々の出来事をきいた。又村は12軒で、毎月、村の総代を1軒ずつ交代にやること。毎年2人ずつを村の費用で伊勢参詣にやること、村には無人の尼寺があって、そこで5、6、7の3ヶ月間富山から教師を雇うて来て、子供に学問をさせること、及び毎夜生徒を2人ずつそこに寝泊りさせること、日露戦争の動員令が下った時には、上瀧町カミダネから2人の飛脚が村田銃ミヅシを肩にして水須から山越をして来たことなどをきいた。其夜は私等は座敷で夜具をきせてもらって、蚤にさされながらも、兎も角もつかれの為に、気持のよい睡眠をとることが出来た。

翌朝私等は、帰ることに決した。有峯から富山へ帰るには、笠ヶ岳を越えて水須に出て、上瀧から帰るか、或は亀谷川を川に沿うて下るか、或は、立山温泉に迂回して、更に富山に向うか、或は私等の通った道をとるかであった。しかし、私等は一番容易と云われて居る最後の道を再び取ることに決した。そして、又々、元来た道をとって飛騨街道に出た。しかし今迄の強行は、今日は降り道を取っているにもかかわらず、激しい疲労の為に、遂に、庵谷で1泊せしむるに至らしめた。其翌日、私等は富山へ帰着した。

9月東京へ帰ってから、私は薬師岳から見たあたりの光景を忘れるわけには行かなかった。そこは絶えず一の幻像となって、私の頭に浮んだ。しかし、私は一つのことを有峯できいて来ることを忘れて仕舞った。それは有峯から信州まで抜けることが出来るであろうかと言うことであった。私は友人に質した。誰でも抜けられるに違いないと言うことには一致したが、有峯には其案内者があるだろうかと言うことは、殆んど衆口一致して否定した。私は翌夏の来るのを待った。そして夏休暇が来ると共に、私は急卒に帰省して、以前の一行と共に兎に角もう一度有峯に行って、出来得るかぎり信州行を試みようとした。私は内の若者を頼んで、糧食をすっかり用意して、今度は道を変じて水須から笠ヶ岳を越えて行くことにした。

私等は朝4時頃に出立して、私の家から3里の上瀧を経て、水須村ミヅシについたのは正午であった。有峯はここから8里の無人境を通らなければならないのである。私等はここで暫く休んで、村はずれから、有峯の方へ掘凹められたような道を進んだ。

(次ページへ続く)

雑木を分けながら行くと、途中幾度も、兎が私等の姿に驚いて逃げまどうのに会う。3時頃に雷鳴が頻りと響いて、夕立のために濡れながらも、野営地に早く到着しなければならない懸念があるので、進んで行った。丁度日の暮れ時分に和らかい草山を右に少し降りると、クマゴと云う、溪流のほとりに小舎がある処があったので、そこで泊ることにした。此の溪流は熊野川の源流をなしているのである。

翌朝、そこを発して登ると、間もなく海拔5600尺の東笠ヶ岳の頂上に達する。ここには地藏堂があって、初めて偃松が眼につき、西南には秀麗なる西笠ヶ岳が真近に立っている。こらは白山、立山、薬師岳、黒部五郎等が物凄いほど威嚇的に屹立して、弥陀ヶ原が長く雄大なる裾を引いているのが手に取るように見える。道は下って、下りきるところにシケノベと云う平らがあって、小口川の源流のほとりに倒壊した小屋がある。道はそこから少し爪先上りとなり、更に下ると、溪谷らしいところがあって、それを又登ると、最後に針葉樹の間をひた降りに降って有峯の村に到着する。丁度それは昼頃であった。私等は去年泊った河口方へ入った。

炉辺に集って居ると、不在であった主人は仕事から帰って来た。私等は、挨拶匆匆、信州行の目的を話して、誰かして呉れる人は無いだろうかと云うと、主人は信州へ抜ける道を知っている人は此の村には無いことを云って、頻りと其考を止めさせようとする。誰か行って呉れる人が無いか色々聞き合せて貰ったが、誰も無さそうなので、私の永らくの希望はすっかり裏切られて仕舞った。詮方なく有峯からの信州行を断念したが、私はせめてもう一度ここから薬師岳に、そして出来得可くんば上ノ岳にも攀じてから、方向を転じようと思った。

翌朝私は連れて来た2人の若者を、飛驒の方から返して、案内なしで、私等だけで薬師へ向った。美わしき水、美わしき深林、壮大なる高原は、依然として昨年のみまである。私の渴望していた信州方面の山々は、容易に究めること

の出来ない神秘の色に閃きつつ立っている。薬師岳への登り道は、昨年よりはずっとよくなっている。其故は頂上の祠堂新築のため、大勢で登ったからだ云う。私等は頂上近く進んで行くと、誰だか人声ができる気色がある。近づいて見ると中村、三枝の両君が信州の案内者をつれて、五色ヶ原の方から縦走して来たのだと云うのであった。私等は奇遇に驚いた。そして暫らく一所にそこに展望していると、すっか



(次ページへ続く)

り霧が取り巻いて仕舞ったので、私等は両君に先んじて太郎兵衛平に降りた。そしてそこで昼飯を喰ってから、上ノ岳に登ろうと云う考を止めて有峯の方へ帰った。それは時間が遅くなったのと、霧が懸って来たからである。

私は帰ってから、此後をどうすればよいか考えた。そして何とかして、外の方面で埋め合せをしなければならぬと思った。そこで、私は立山温泉へ真川を下った。そこから大日岳によじ、更に引返して、針木峠を踰えて大町に行き、青木湖、木崎湖を見て、北城から白馬山に登ろうと云う案を立てて皆の同意を得た。

明くれば、今日は私等は真川下りをやらなければならない日である。辻本さんの記事を『山岳』で読んで凄味を感じしめられた真川の流れば、今度新に徒渉することなくて行けるように林道が出来たと云うので、案内も備わずに出掛けた。丁度有峯の村はずれから真川の岩井谷の方へ行くと云う担夫が二人行くので、其後ろからついて行く。真川の谷へ乗越す深林美しい折立峠を登ったあとは、殆んど楽な道を行くばかりである。併しこれより先は、薬師へ行く途中で渡った真川と異って、物凄いほどの水量がある。岩井谷の水を合せた後の真川は特に壮んなものである。

湯川^{ユカフ}の荒涼たる兩岸と異なって、此溪谷は珍らしいほど潤葉樹が多くて、非常にうるおいに充ちた溪谷を形成している。それが元と有峯の所有林であったのが、飛騨の人に売渡されて、丁度私等の通った時は、伐木最中なのであった。道は予定していたより遥かに遠くて、ところどころ道を迷いそうなところは無いでもなかった。ある箇所、川へ降りそうなところと、右の方山深く分入りそうなところがあって、試みに川の方へ行ってみると、行けそうもないので右の方へ折れた。それから先で数河川^{スゴウガワ}を渡って、立山温泉道と合したのは、夕暮で、向う更に約1里の温泉に到着した時は、日はすっかり暮れて仕舞っていた。

其翌日から私等は新しい計画によって動いた。(明治42、3年夏)



『日本アルプスと秩父巡礼』回顧

私が、はじめて出した山の本『日本アルプスと秩父巡礼』（大正8年6月、北星堂刊。のち改訂増補して『山と溪谷』と改題、昭和4年5月第一書房より刊。さらに昭和19年9月『山と溪谷——紀行篇』『同——隨筆篇』の2部に分け、新潮文庫として刊。最後に昭和26年8月、全篇改訂増補、角川文庫本2冊となる。）に載っている多くの登山の文章を書きはじめたのは、明治の末年ごろ、日本山岳会に入会して、その会の雑誌「山岳」への寄稿を求められてからである。（明治43年「越中の毛勝山」。明治44年「十文字峠より金峯山へ」。後者は雑誌掲載当時は文章体で後に口語体に改訂。その頃の雑誌「山岳」は、年に2、3冊の刊行で、厚い立派な雑誌だった。）

はじめは頼まれていやいやながら書いたのだったが、やがて、大正のはじめ頃に日本山岳会の幹事にさせられてからは、責任上、止むを得ず積極的に筆を執るようになった。



以後、書く機会がふえるにつれて、旅行した直後の記録文章だけでは済まなくなって、それ以前数年来の登山のことから、さらには10年も前の登山紀行の体験まで記憶を辿り、また、友人の書いたものを参照したりしつつ書いた。この、私の登山文章に2種類を生じたことについては、すぐ友人読者からも指摘されて、直後の記録と過去の回想とではやっぱり出来栄が違うなどと言われたりした。（昭和4年版『山と溪谷』所載の文中、旅行直後の文章の主なものは「笛吹川を溯る」大正4年、「上高地溪谷」大正5年、「釜の沢より甲武信岳に登る」大正6年、「晩秋の奥秩父」「冬の丹波山」大正7年、「秋川の上流」「数馬の一夜」「御岳と乗鞍岳との間の幽境」大正9年、等。旅行後年を経ての文章としては「初めての山旅」明治41年の旅を大正7年に、「薬師岳と有峯の孤村」明治42年、3年の旅を大正7年に「甲州丹波山の滞在と大黒茂谷」「梓山よりハケ岳・御岳を経て上高地に至る」明治45年の旅を大正7年に、「金峯山より雁坂峠へ」「槍ヶ岳より日本海へ」大正2年の旅を大正5年に、等。なお、当時の山岳隨想として「新緑の印象」「深林と溪谷」大正7年、「山はいかに私に影響しつつあるか」大正8年慶応大学講演、「山に入る心」大正12年、等が同書に収められてある。）

大正7年ごろの文章が、この本で目立って多くなっているのは、さすがに、山のことを書いているうちに、その書くことに興が乗ってきたのと、またもちろん、私の登山熱自体が非常に高まってきていたためでもあろう。何しろ、そのころの私は、1年に何回も、春につけ、新緑の候につけ、夏につけ、冬につけ、山へ溪へと分け入らねば気が済まなかった。

時はちょうど第一次大戦のころで、日本の世の中もどンドン変って来つつあった。山登りが本当に熱心に世間一般にも行われた境がまさしくこのころに当る。大正7年8月、東京府立第一高等女学校が、日本ではじめての女子団体登山とすることを、白馬岳めがけて敢行して、女人にあるまじき不謹慎の行いであるといったような喧ましい論議を醸した。木曾から東京の飯田町へ向う汽車の中で、私はその府立第一高女の市川校長と、商科大学や青山学院の先生などとも乗り合わせて、市川君から女子登山は当然のことではないかとときかされ、私達も同意した。とにかく、喧ましい一部の批評にも拘らず、それ以後、女性の登山をはじめ一般世間の人の登山が年を逐って盛んになり、中部アルプスの山々などでも、そのために初めての山小屋が開設される所など幾つも出てきた。

こうした雰囲気時代に、人から出せ出せと言われるままに出した『日本アルプスと秩父巡礼』は、3000部以上を売り尽して、私ばかりでなく、元来英語の本の出版元であった北星堂をもびっくり仰天させたことである。

時代とともに、それ以前の明治の山岳文学書等の固苦しい漢文口調を脱して、見た通り感じた通り思った通りのことを、自山に卒直に書く私らの文章が現れた。その頃、右の『日本アルプスと秩父巡礼』などによって山岳文学に接しはじめたという人にとっては、それはとても面白くて、「小説よりも面白いものに思えた」などと後に感想を洩らす人もあった。

そんなわけで、この本は、まもなく、今度は本格的な山の本の出版として、第一書房から(冠さんの本と一緒に)出し直されることになったが、これは大分高価な本だったにも拘らず、やはり、何千と売れたようだった。(当時、山の本は夏だけが販売期だったが、やがてそれも、1年中に亘るようになっていった。)

山について、また山登りのことについて、ものを書くことは、私個人にとっては、自己を、また人生を、客観視する援けとなった。私は山に登り、またその山に登る自分

を反省することで、私自身の不幸や弱点を超えて生きることの元気と知恵を、また環境の自然や人間を愛する力を得て行った。人間の哀しさ、孤独さの壁にぶつかって、それを抱えて山に入り、それを克服すべく山を出るというような……………私の友人、木暮理太郎君の場合も、似たものがあつたのではないかと思う。

(日本山岳会会員)

「本の手帖」1962年2・3月合併号(昭和37年3月1日・昭森社発行)より

月刊「本の手帖」は昭和36年3月1日、森谷均によって創刊された。森谷均は明治30(1897)～昭和44(1969)年の出版人。昭和9年書物展望社へ入社。10年昭森社を創業、美術書、詩集の特装本の出版を行う。21年神田神保町に喫茶店らんぼお、アテネ画廊を開く。その2階で21年「思潮」、36年「本の手帖」、41年「詩と批評」を創刊。戦後詩の拠点とした。

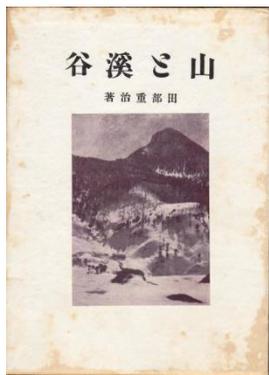
第二巻第二号の特集は「山の本」。松方三郎、深田久弥、尾崎喜八、串田孫一、冠松次郎、田部重治らが執筆。第八巻第七号(通巻77号)の特集は「山と芸術」。尾崎喜八、串田孫一、高須茂、山本太郎らが執筆している。

昭和44年、森谷均の死去に伴い、第九巻第四号(通巻83号)をもって終刊となった。昭和57年、同じ昭森社より「季刊本の手帖」が創刊された。

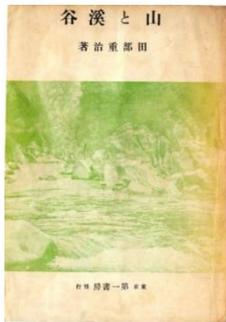
《参考》「本の手帖」の多彩な特集テーマの例

(外国と文学) フランス、英米文学、ドイツ文学、ロシア文学、外国文学とキリスト教、(書誌的テーマ) 絵入本、詩の雑誌、発禁本、美術雑誌、処女詩集・創作集・歌集、豆本、美術家・文筆家画文集、名訳詩集、リトル・マガジン、ポスター、日記、(日本の作家等) 竹久夢二、金子光晴、西脇順三郎、三好達治、佐藤春夫、露風・酔茗・元吉、辻潤、高見順、堀口大学、滝口修造、(外国の作家等) ジャン・コクトー、シェイクスピア、ダリ・エルンスト、エリオット、サルトル、ヘンリー・ミラー、ホアン・ミロ、アンドレ・ブルトン、(主義) シュルレアリスム、ニヒリズム、アヴァンギャルド、ダダ、(その他いろいろ) 近代文学館、詩と版画、ベストセラー、父、民芸派、大衆文学、前衛映画、作家と画家、戦争、自殺、現代詩…

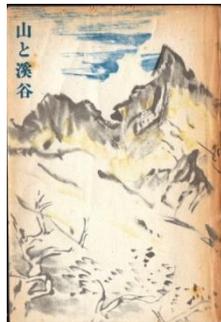
田部重治・山旅の本コレクション



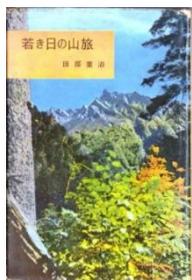
昭和4年6月15日
第一書房



昭和10年6月1日
(普及版)



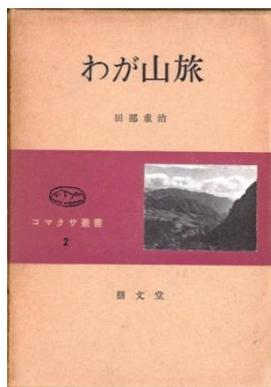
昭和14年6月5日
(戦時体制版)



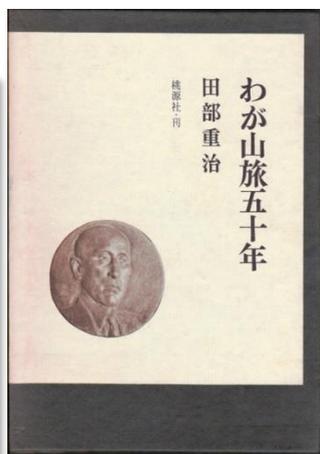
昭和31年11月15日
河出書房



昭和34年1月15日
第二書房



昭和31年8月25日
朋文堂



昭和39年5月20日
桃源社



昭和43年12月25日
三笠書房

北光クラブ・サマースクール
昆虫観察
7月31日(日) 天気・はれ

早朝5時、北小西門内に集合、「今日とりたい虫」を発表し合った後、車8台を連ねて日光市岩崎に向かい、いつもの岡部さん宅の雑木林に入って「虫捕り」に励みました。とりたい希望の多かったカブトムシは存分に収穫できましたが、クワガタは少なかったようです。近くの水路にも網を入れ、カワムツの他、昆虫ではトンボのヤゴなどが捕れました。岡部さん宅へお礼に寄って記念撮影後、今日の収穫に満足して、ここで解散としました。

昨秋の水害で、岩崎辺りにも被害があったようですが、幸い我々のフィールドは無事でした。いつも寄っていた御成橋の河川敷は、ヤナギの周囲の深い草藪が見事に流されて、すっかり様変わりしています。



日光市岩崎
雑木林と水路の間で

参加者内訳

1年生2名、3年生5名、5年生1名、6年生1名、幼児1名、
保護者8名(計18名)＋スタッフ2名

捕れたもの、採れたもの

カブトムシ、コクワガタ(♀)、ノコギリクワガタ(♂)



見た・聞こえた鳥

ガビチョウ(ここまで来たか外来種)



青々とした夏の田の隅に車を置いて出かけ…



意気揚々と引き揚げて来る

北光クラブ・サマースクール
魚類観察

8月7日（日） 天気・はれ

北小西門内に集合後、車 10 台を連ねて北押原公民館へ向かい、ここへ車を置いて各自道具を携え、住宅街を歩いて、養魚場近くの田んぼの水路へ。水の中に降り、てんでに網を入れてしばらく“漁労”に夢中になります。その後、車を黒川近くの路肩に移動し、何台かに分乗して田の中の畦道へ。雑木林の縁に沿った水路沿いに、水に入ったり、畔が上がったりしながら、時折網を入れて生息する生き物を調べながら進んで、駐車場まで歩きました。昨秋の洪水の影響はどんなものだったか、どこでもアメリカザリガニはよく捕れましたが（子どもたちにはうれしい収獲？）、珍しい獲物はありませんでした。改修工事は方々で進行していますが、水量が多いこともあって、希望の声があったギーコンは見送り、緑豊かな田の中の水路歩きも一興ではありました。PTA 会長の半田さんには、網やバケツなど濡れた道具を運ぶためにトラック 1 台出していただき、大いに助かりました。



北押原公民館脇の水路にて

※ 参加者内訳

1年生1名、2年生2名、3年生3名、4年生1名、5年生4名、6年生1名、
高校生1名、保護者10名（計23名）＋スタッフ2名

※ 捕れたもの、採れたもの

アメリカザリガニ、カワムツ、コイ、タモロコ、ドジョウ、マルタニシ

※ 見た植物

（水草）セキショウモ、ナガエミクリ



❁ 虫捕りと魚捕りの点景



恒例の“朝礼”



雑木林の中で
獲物に群がるハンターたち



水の中にも
昆虫はいます



マツモムシ？



アメリカザリガニ
いずれも「昆虫観察」での獲物、下段中の写真も



カワムツの婚姻色



←北押原の水路に早速入る



上殿の田んぼの縁の
雑木林沿いの水路へ



田んぼの中の道を魚を求めて歩く

女峰山ハイキング（続）
7月24日（日） 天気・はれ

私の見た女峰山登山記

～西山義信氏の喜寿を祝って～

傍から見たら、おやじ、せがれ、孫の3代で来たかと思われそうな、西山(77歳)、阿部(58歳)、佐々木(日光東中2年)の3人で、日光女峰山に登った。西山さんの喜寿のお祝いを兼ねての山行である。

光徳入口から志津林道をしばらく進んだところで想定外の通行止め。それでも何とか志津を越え、時々、道端にアカバナやホタルブクロを見ながら馬立に到着。キオンやゴマナの群生する森の斜面をいったん谷底まで降りる。裏見滝・寂光滝方面への道を右に見送って女峰山への登りにかかった。これといった植物もなく、今年は夏の訪れが早く、さすがに高山植物の花の季節も過ぎてしまったかと思いつつも、最後の水場付近や山頂付近に望みを託す。谷の右岸(下流を向いて右側)に沿って登り、アズマジャクナゲの群生地までひと休み。西山さんは「どうして女峰山ほどの山が、日本百名山に入らなかったかな」とつぶやく。確かに帝釈山から女峰山を望みし時、やせ尾根の奥に聳える女峰山の槍ヶ岳を思わせる雄姿は、百名山にふさわしい品格(深田の言う百名山選定の3つの基準の内の第一)を持ち合わせていると言える。またコニーデ型の典型的な火山である男体山に対して、女峰山は古い火山であり、旧火口が崩れ、浸食によって形成された稲荷川源流、雲竜溪谷の存在は女峰山に特殊な自然環境をもたらした。

ニョホウチドリ、コウシンソウ、ユキワリソウ、といった貴重な高山植物を育む地形や自然環境と合わせ見た時、女峰山は疑いなく、個性(三つの基準の内の第二)を持ち合わせていると言える。残念ながら、日本の山から100を選ぶ、といった場合、男体山と女峰山いずれも、というわけにもいかず、持ち前の品格、すなわち誰が見ても立派な山だ、と感嘆するもの、を考慮したとき、男体山に譲らざるを得ないのも確かである。さらに山の歴史(三つの基準の第三)を言われれば、有無を言わず、であるう。

(次ページへ続く)

『日本百名山』の後記で、「一番迷ったのは上信越であった」とした中に女峰山をあげていることでよしとしたい。(但し、女峰山を上信越の山とするのは誤り。)

キオンやゴマナの草地上に1本のクルマユリを見つけ、まもなくガレ場を渡って左岸に移り、小さな沢を登る。最後の水場に来ると案内人も初見のミヤマタニタデ、オオチドメ、クロクモソウを確認。花は終わってしまったがつやのある丸い葉のイワカガミが出てくると、いよいよ高山に来たな、という雰囲気である。左に深い谷を見おろす所で初見のコバノゴメグサを確認。唐沢小屋に到着していざ山頂へ。この辺りは明るい新緑で晩春か初夏を思わせる彩り。さすがに高山植物も最高の時節であった。モミジカラマツやコパイイチヤクソウを見ながら森を進むとやがてガレ場に出る。タカネニガナの黄色い花、すでにトウヤクリンドウの白い花も見られる。山道の頭上の急斜面にはオノエランやテガタチドリがしがみ付いている。マルバシモツケの白い集合花が見られたあたりからハイマツ帯となってきた。ついに山頂に到着。周辺に咲いていたのはタカネニガナ、イワオトギリ、ミヤマダイコンソウといった所か。

西側の帝釈山が雲に見え隠れしている。一瞬、北側が完全に晴れて、栗山の山々が見えた。女峰山と帝釈山をつなぐ稜線はハイマツの生えるやせ尾根で、栃木県内では唯一、アルプス的な景観を呈している。稜線をたどり、帝釈を越えて富士見峠に降り、馬立に戻る予定であったが、昼飯を食べ、記念写真を撮り、眺望を楽しんで満足した我々は、帝釈山をこの次の機会に譲って、同じ山道を下ることにした。

西山さんは剣道で足に肉離れを起こし、今回は言わば痛み上がりでの参加であったが、全く疲れた様子もなくまだまだ行けそうである。今後も記録更新に励まれますよう。



アズマシヤクナゲ
群生地にて

高校生の時、秋ではあったが父と初めて女峰山に同じコースを登り、後に国語の課題として提出した短歌3首。

山道の行手に群れるイワカガミ 可愛らしさに足も戸惑う

白樺の唸る葉音も山の音 力強さに心も締まる

振り向けばだいだい色に染まる山 また来るからと先を急ぎぬ 良司

(阿部良司)

ヤブミョウガ

～地上の茎から自分の身をささえる根を出す植物～

お盆休みで裏庭の草むしりをしようと思った。ミョウガも花の季節だが、ヤブミョウガの白い花もたくさん咲いている。昔はヤブミョウガの花など見たことはなかったが、もしかすると、それは春のうちからこまめに草むしりをしていたから、花の咲くほど大きく成長しないうちにおしり取られていたのかも知れない。昔と比べて最近では町の中でも藪が多くなった気がする。それは空地が増えたためであり、いずれにしても高齢化のせいなのだろう。あるいは若者がずぼらになったせいかな。

根元を見たら10cm位上のあたりから根がななめにまっすぐ伸びて地面に入っている。いかにも根元の土が流されて根が露出したようにも見えるが、そんなはずはない。

これは成長と共に茎が倒れやすくなるのを支えるためにあとから出て来た根のようである。それよりも太いうす緑色の匍匐枝も出て、水平に伸びている。牧野日本植物図鑑ではこの根茎についての記載はあるが、茎をおさえるためのななめ下に向かって出る根については書かれていない。もちろん図にも描かれていない。植物の研究など、ずいぶん進んでいるように見えて、実際は人の健康に役立つ植物の研究は著しく進んでいるものの、どうでもよい植物の研究など、形態さえ明らかにされていないのかも知れない。そんなことを思いつつ、車に乗るため自家用に借りている駐車場に行くと、隣はヤブミョウガの花ざかりである。ここはアズマネザサやオカメザサの藪で、それらの間にヤブミョウガは生えている。念のために根元を見てみると、なんとこのヤブミョウガには、匍匐枝を1～2本出しているものの、ささえのための根は全く出ていない。

確かに、ここにはササがたくさんあるから、それらに寄りそうことができるので、自分の身をささえるための根は必要ない、と言えそうである。それではその根を出すか出さぬかの判断はどのようになされるのか。

なんともユニークな植物である。

(阿部良司)



ヤブミョウガの群生



気根?



花



実

「序文」に見る人生観

僕は人生観や哲学について書かれた本が好きだ。といって、そういう分野の本を特に集めているわけではない。山岳、旅、植物、昆虫、動物、雑誌、そんな書物の中に、ふと、その著者の人生観を見いだしたりすると、とても得したような気持ちになる。そのような著者の人生観をしばしば見出す部分は、序文やまえがきである。

『日本アルプスと秩父巡禮』にはまずなくてはならない山の友である木暮理太郎の序文がある。この序文中にも木暮の山に対する哲学が見える。そして田部による「自序」はこのように始まる。

「本書は作者が山岳、溪谷、深林の間に放浪した過去十年間の記録である。作者は多くの人々のように、初めは海洋の歎美者であったのが、十年前から趣味が一転して、山岳及びそれに付属する深林、溪谷に多大の関心を持つようになった。そして其が作者に与えた影響の多大なるものであったことを認め、それによって得た健康、それによって得たる一種の人生観は、それ以来作者の個性の内に深く根づけられていることを感ずる。」



著者は山や森林、溪谷に大きな関心を持つようになり、それが自分に大きな影響を与えたことを認め、それによって得た人生観は自分の個性を形づくっている、というのである。

山登りを経験した人にとって、その登山が、その人の人生にどのように影響するか。それはその人によってさまざまであろう。どのような山登りを経験したか、どのような態度で、何度の山登りを経験したか、状況はさまざまだから、その受け留め方もさまざまである。しかし、旅は人生の縮図である。その旅においては何が起こるかわからない。何も起こらないかもしれない。しかし旅は、山登りは、回を重ねるほどに、経験を積むことになるものである。思いがけない事態に遭遇する可能性もある。家でじっとしていれば絶対に起こるはずのないようなことが起こりうる。そのような事態を幾度も乗り越えることが人生観に影響をおよぼし、個性を形づくるのである。

人は旅を重ねるたびに一つ、大人になって行くのである。

(阿部良司)

第45号に対して白坂正治氏よりいただいたおたより。

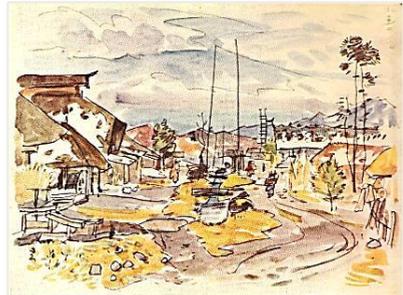
『月報第45号』の「表紙の本」「詩と断章」は中学1年の春休み、穂高書房で買った1冊めです。駅前の佐伯書房で「近頃山岳書の専門店ができた」との情報を得、少し道に迷って来店。和久井さんは突然の少年の出現にびっくりしつつ（多分？）「山の本ではないけれど」とおっしゃりながら棚の上から『詩と断章』をとって渡して下さいました。その時の光景、ほのぼのとあたたかい記憶として残っています。カバーなしの400円。ふりかえると蔵書数が片手に届かなかった時に既に山以外の田部文学の世界にはからずとも触れられたことで、田部重治の奥深さに益々惹かれたのかなあとも思います。田部先生が終生住まれた阿佐谷にある山岳書の聖地穂高書房、人と人との物語はこうして紡がれていくのですね。

‘16 9/4

《訂正》前号「山書談話室」6行め：②も寺門歌人→②も専門歌人



白樺の林に
月のさし入りて
叩けば
幹の音も
白かり
田部重治



滑きかえる
雲舟を消えて
やがたにも
仰がるるかな
八つ岩の峰よ
田部重治

『忘れえぬ山旅』口絵より

田部が山行をよく共にした画家・中村清太郎の絵と、田部重治の詩

阿部良司からの誌上を借りた返書。

佐伯書房、なつかしいですね。学生時代、つまり40年も前になりますか、「中央線沿線古書店マップ」なるものを手に入れて、中野から西へ西へと古書店巡りをしました。

佐伯書房は、一応「山岳書専門」ということになっていたのでしょうか。店主は古老の風格を感じる人でした。「山と溪谷のバックナンバーはありませんか？」と訊くと、「戦前のがいくつかあるよ。そのうちに出しておくから。」在庫があるのがわかっていても、おいそれと注文のあった本を出してくるわけにはいかない古本屋の事情を知りました。数週間後に再び訪ね、おもむろに包んであった新聞紙を抜げてくると、中から「山と溪谷」の戦前版20冊くらいが出てきました。当時戦前版は確か1冊しかもっていなかったもので、何ともいえない胸の高鳴りがあったことを覚えています。

穂高書房はそのころ開店してまもなくだったのでしょうか。「古書店マップ」には名前がなかった。その後、線路の下あたりにあるはずの古書店を訪ね、たまたま休業だったので、途方に暮れてとぼとぼ歩いていると、目の前に「山岳書専門穂高書房」の看板を見つけたのです。

卒業後、上京して穂高書房に行くついでに佐伯書房に立ち寄ってみよう、と思っていたら、すでに阿佐ヶ谷駅前には再開発が進み、様子が一変していました。佐伯書房はどう見つかりませんでした。

(阿部良司)

白樺の林に
月のさし入りて
叩けば
幹の音も
白かり

湧きかえる
雲みな消えて
さやかにも
仰がるかな
八つの峯々

左ページの詩

☎ 第46号の内容 ☎

山行案内	奥白根山ハイキング	2
次回予告等		3
表紙の本	田部重治著『日本アルプスと秩父巡禮』	4
活動報告・1	北光クラブ・サマースクール～昆虫観察～	15
活動報告・2	北光クラブ・サマースクール～魚類観察～	16
活動報告・特別編	女峰山ハイキング(続)	18
Uniqueな鹿沼の植物	ヤブミョウガ	20
愛書家のひとりごと	「序文」に見る人生観	21
山書談話室		22



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第46号

2016年9月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ 検索